

「豊かな自然環境」 —生物部の活動報告—

Cover Story

今回は生物部キャプテン、3A 仁村君が校内の動植物調査について寄稿してくれました。

生物部キャプテンの仁村です。部を代表し、本誌に記事を掲載させて戴けることとなりました。

当部では、昨年度より「校内の動植物リスト作り」を行っています。校内の自然環境の現状を把握し、将来の保護活動につなげるためです。現時点で、次の種数が確認されています。

- ・昆虫類 315種
- ・その他節足動物（クモ等） 50種
- ・哺乳類 6種
- ・両生類、爬虫類 8種
- ・鳥類 24種 ほか
- 動物種合計：**424種**
- 埼玉県レッドリスト記載種：**21種**

今までも多くの人が本校の「豊かな自然環境」について語ってきましたが、それを分かりやすく表すようなデータを得られたことがとても喜ばしいです。鳥類やトンボ類をはじめ、埼玉県や国のレッドリストに載っている絶滅危惧種も数多く確認されています。

今年度は知識の豊富な1年生も入部し、リストの種数は日々増え続けています。また現在、主要な種類をピックアップした「志木高の動物図鑑」の編纂も行っています。

我々は現在、**志木高が環境省の「自然共生サイト」に認定されることを目指しています。**

自然共生サイトは「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」が認定されるもので、現在全国で328カ所、県内では9カ所が認定されています。

そして昨年度、慶應義塾のキャンパスで初めて、湘南藤沢キャンパス（SFC）が自然共生サイトに認定されました。敷地内の豊かな自然環境と、最新技術も取り入れた先進的な取り組みを行ってきたことが評価されたものです。また、日吉キャンパスでもサイト認定に向けた動きが始まっているとのことです。

自然が売りの志木高が、これに遅れを取るわけにはいきません。そこで現在、先駆者であるSFCの環境情報学部の研究室と連絡を取り、来年の春に自然共生サイト認定の申請を行うことを目標に、取り組みを始めています。具体的には、森・水辺（池、水田）・草原（広場、農園）を核に、校内全体の自然環境にコンセプトを持たせて改善・整備するということです。また、先述した調査をはじめ、モニタリングの継続・強化も行っていきます。

このかけがえのない自然を守るため、今後も生物部の活動に理解と応援をいただきたいと思います。

←制作中の「志木高動物図鑑」の抜粋

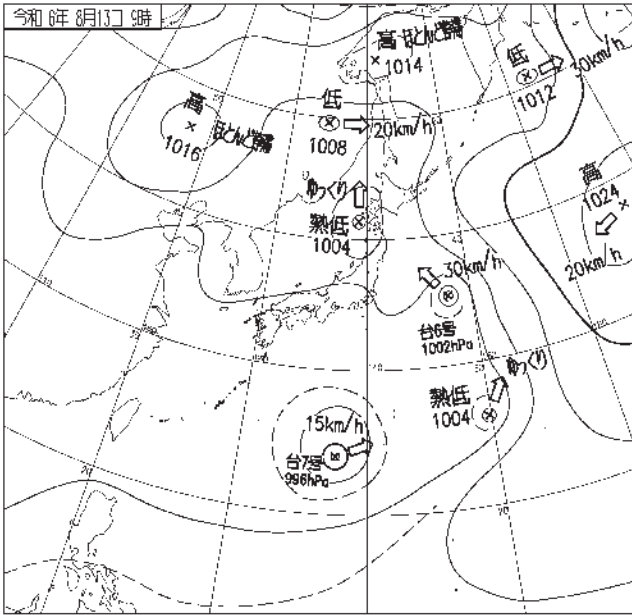
(3A 仁村高士郎)



2025年は梅雨らしい雨もなく6月後半から猛暑が続いています。例年ならオホーツク海に高気圧が停滞し、東日本には北東の風が吹き肌寒い日々（梅雨寒）があるものですが、今年は偏西風がずっと北に行ってしまうオホーツク海の涼しい空気がやってきません。その代わりに早くも夏の太平洋高気圧が張り出していますが、これもまたずいぶん北東に偏っています。このパターンは昨年8月中旬や、少し前になりますが2016年8月にもありました。※このあたりのしくみを詳しく知りたい人は3年生の自由選択地学で！

太平洋高気圧が北に偏る夏は台風がたくさんやってきます。台風は高気圧の外に押し出されますが、いま日本の南はぽっかりと気団の空白域になっています。加えて7月はまだまだ西からのアジアモンスーンが強く、暖かく湿った空気を運んできます。北に偏った太平洋高気圧からの東風とアジアモンスーンからの南西風によって、日本の南の空白域では反時計回りの渦「モンスーンジャイア」ができます。この中では小さな台風の種が成長しやすい場になっています。さらに今年は西日本でさっさと梅雨が明け、日本の沿岸の広い範囲で海面水温が早くも30℃を超えています。

今年は6月に入ってから台風1号ができ8年ぶりの遅いスタートでした。しかし今は日本のすぐ近くでも台風ができる準備ができています。夏休みの間に台風はいくつやってくるのでしょうか。



2024年8月13日の天気図



2025年7月6日の気象衛星画像tenki.jp（日本気象協会）より

(Higuchi)

Haiku

【夏の句】

七分まで開く校門さみだるる

空梅雨の胡瓜の如き亀の首

尺蠖の風にそよいでるたりけり

大なる気球の如き夏木かな

木洩日をプール帰りの五六人

前北かおる

現在進行中の再開発で渋谷駅周辺はずいぶん変わってしまったが、ハチ公はまだ健在らしい。携帯電話がなかった時代、人との待ち合わせは「渋谷駅に何時」では成立しなかった。事前にもっと詳しく場所を決めておく必要があって、「渋谷のハチ公前」はそういう時代の定番の待ち合わせスポットだったのだ。私が渋谷に通う高校生だったいまから20年以上前、ハチ公前はすでに有名すぎて逆に避けていたように思う。いまも渋谷のシンボルとして親しまれているが、ではそのハチ公像の作者は？と聞かれたら、高校時代の私を含め、ほとんどの人は答えられないに違いない。

1923年生まれ、秋田犬ハチは、亡くなった飼い主を渋谷駅で待ち続けた忠犬として有名になり、1934年に銅像が造られて渋谷駅に設置された。この《忠犬ハチ公像》の作者は、^{あんどうてる}安藤照（1892-1945）という彫刻家である。当時まだハチは生きていて、像の除幕式にはハチ自身も列席している。しかし、戦争末期の1944年、金属類回収令によって像は撤去・溶解されてしまう。これを惜しんだ人々は戦後の1948年、^{たけし}ふたたびハチ公像を造って渋谷駅に設置する。初代を模してこれを造ったのは、安藤の長男士。いま見ることができるハチ公像はこの2代目である。

失われた初代ハチ公像の作者、安藤照を紹介する東京で初めての展覧会が、先月から渋谷区立松濤美術館で開催されている（8月17日まで）。安藤は鹿児島出身。東京美術学校（いまの東京芸大）で朝倉文夫（早稲田のキャンパス中央広場に立つ《大隈重信像》の作者）に彫刻を学び、在学中から官設の公募展で入選、後には審査員も務めるなど、大正から昭和戦前期に活躍した彫刻家の一人である。にもかかわらず、戦後その存在は歴史の中に埋もれてしまう。

その直接の原因は、現存する作品の少なさである。それを補うように、展覧会場には同時代の様々な作家の彫刻作品が並ぶが、それらは安藤の作風を理解する手がかりにもなっている。単純に楽しめるのは動物彫刻で、安藤の友人・堀江尚志の《鯉》、後輩・^{こむろとおる}小室達の《仔兎》も良いが、私が一番気に入ったのは安藤の《兎》。実物を見ると、これをチラシに起用した担当者の気持ちがよく分かるが、本物は写真よりも一層かわいい。彫刻はやはり実物を見るべきだということもよく分かるので、ぜひ会場で本物を見てほしい。ちなみに、小室は宮城出身で、青葉城に立つ《伊達政宗騎馬像》の作者。3年生は見学旅行で仙台を訪れるので、自由行動で青葉城に行くなら現地で思い出してほしい。



黙然たる反骨 安藤照

没後・戦後80年
忠犬ハチ公像をつくった彫刻家
Silently Rebellious ANDO Teru:
The Sculptor of the Faithful Dog Hachiko's Statue

2025.6.21sat ▶ 8.17sun

入場料：一般1,800円（税込）、大学生800円（税込）、高校生・中学生500円（税込）、小学生300円（税込）
※中学生・小学生は保護者同伴で入場可能。小学生以下は入場料無料。会場内飲食・お土産販売あり。
※会場内飲食・お土産販売あり。会場内飲食・お土産販売あり。会場内飲食・お土産販売あり。

会場：渋谷区立松濤美術館（渋谷区松濤4-1-1）
TEL: 03-3463-7947 | <https://shibuya-museum.jp>

展覧会の終盤で取り上げられるのは、戦時中、戦意高揚に利用された彫刻の数々。そして、1945年5月の空襲で、代々木の自宅兼アトリエにいた安藤が、避難した防空壕で亡くなったこと、アトリエとともに多くの作品が失われたことが紹介される。最後の展示物は安藤の死を伝える小室の日記である。安藤の生涯と作品を丁寧に紹介することで、本人の命とともに、その生きた証でもある作品の多くが永遠に失われてしまった、その喪失の大きさが伝わる。よく構成された展覧会である。

加えて、世界を見渡したとき、焼け野原の代々木は、残念ながら過去の風景ではない。この展覧会は副題に「戦後80年」を掲げるが、各地でいまも戦争によってすべてを奪われる人たちがいること、あらためて心にとめたい。

硬式庭球場から野球場に向かう道の途中、庭球場からすぐ右手を見ると葉に光沢のある人の背丈ほどの植物の群落がある。「ヤブミョウガ」という。葉の色、形、光沢などがミョウガに似ているために名付けられたようだが、ショウガ科（ミョウガはこれ）ではなくツクサ科に属する。本校では初夏に花茎が伸び、その上段に直径5〜6mmほどの小さな白い花が咲かせる。花は、段々に集まって咲いているように見えるので趣深い。実は直径5mmほどのきれいな青藍色なので、観賞用に植栽される。因みにこの青はメタリックにも見える『構造色』である。食用にすることはほとんどないが、開いていない新芽を塩茹でにすることはあるらしい。また、古来中国では、地下茎を頭痛薬として処方していたらしい。

[2025年4月～2025年7月までの開花情報]

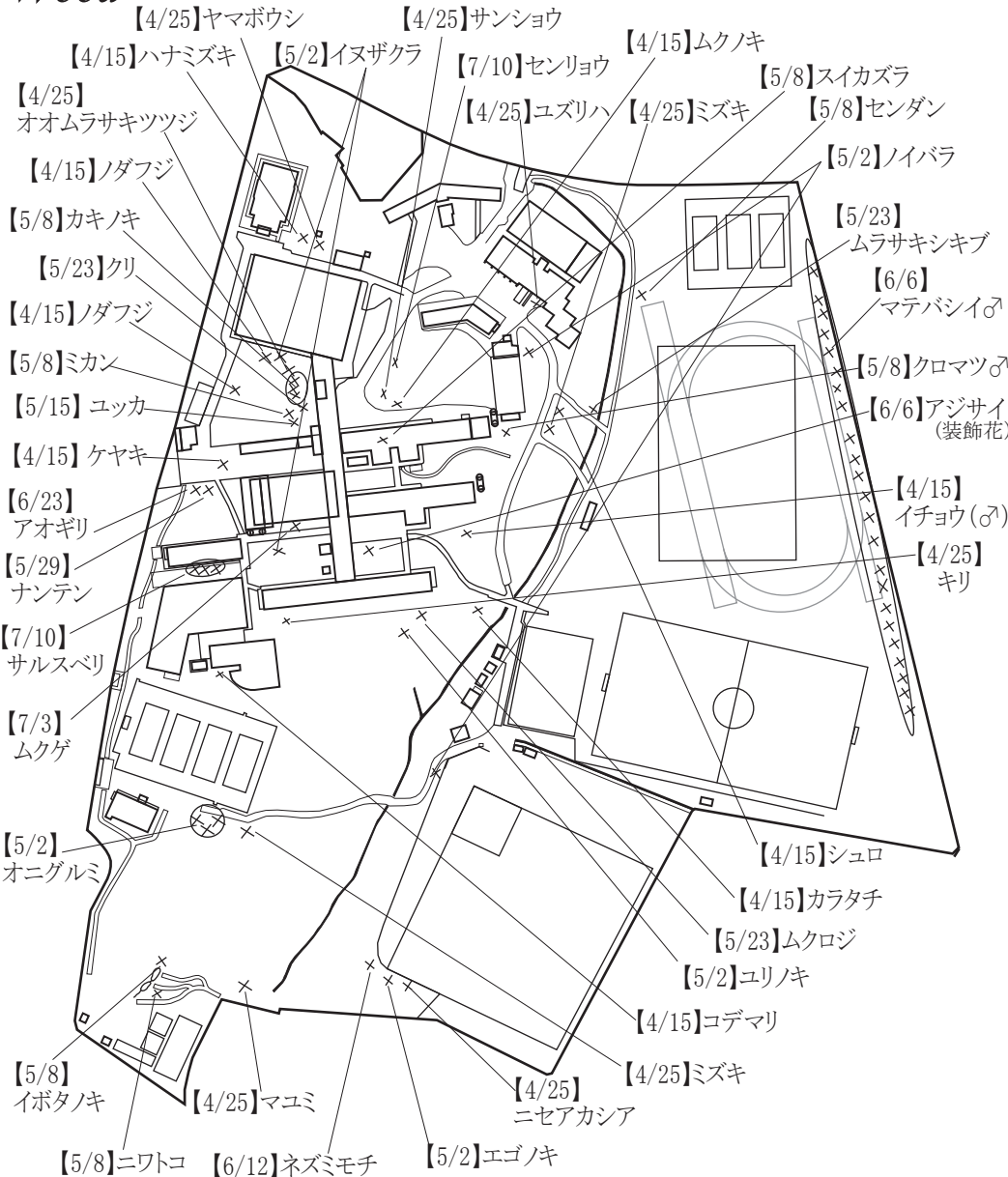
Grass

- 15.Aprカラシナ, シバクサ
- 25.Aprカモジグサ, ウマゴヤシ, ヒメジョオン, ナガミヒナゲシ, ヤブジラミ, ヒルガオ, ニオイスマレ, アメリカフウロ, ギンギシ, ハゴロモジャスミン, シロツメクサ, オオアマナ, ジュウニヒトエ, カラスビジャク, ツボミオオバコ
- 2.Marオオバコ, キツネアザミ, チガヤ, ムギクサ, アカバナユウゲショウ, イボキンボウゲ, ニワゼキショウ, ツルウメモドキ
- 8.Marトキワツユクサ, スイレン, ノビル, ドクダミ, オオジシバリ, ヤセウツボ
- 23.Marハナヤエムグラ, ヨウシュヤマゴボウ, ツユクサ
- 29.Marハキダメギク, ツルマンネングサ, ツメクサ
- 6.Junノブドウ, ネジバナ, ワルナスビ
- 12.Junチヂミザサ, トクリマメ, ヤブガラシ, ツメクサ, アメリカセンダングサ
- 23.Junハエドクソウ, ヤブミョウガ, ナルコビエ, タケニグサ
- 3.Julイヌホオズキ, アメリカオニアザミ, ジャノヒゲ, シオデ, イグサ, ヒメガマ
- 10.Julヘクソカズラ, オヒシバ, メヒシバ, ノボロギク, ヤマノイモ, セリ



ヤブミョウガ
ツクサ科ヤブミョウガ属

Wood



(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	歴史・美術 (博物館)	原 浩史 (Hara)
	俳句	前北 馨 (Maekita)
	日本文化 (香道)	井之浦 茉里 (Inoura)
	日本文化 (茶道)	池田 卓也 (Ikeda)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	植物画・編集	荒巻 知子 (Aramaki)